

おおひら 大衡窯跡群

多賀城跡調査研究所 村田晃一

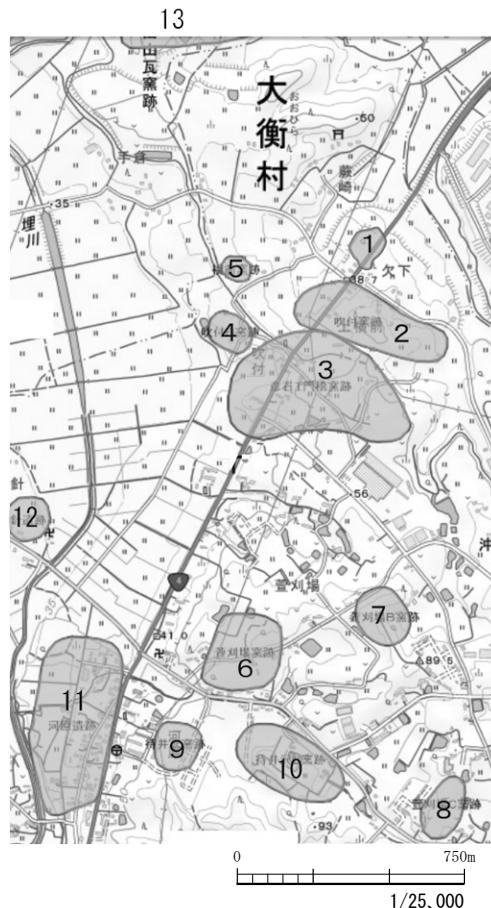
- 所在 地 宮城県黒川郡大衡村大衡字待井沢、萱刈場、駒場字彦右エ門橋・横前・蕨崎ほか
- 立地 環境 大松沢丘陵西端の丘陵斜面や丘陵末端の台地。標高 35 ~ 90 m
- 発見 遺構 須恵器窯、瓦・須恵器窯、灰原、須恵器廃棄土坑、土師器焼成坑、堅穴建物、掘立柱建物など
- 年 代 8世紀中葉～10世紀初頭

遺跡の概要

大衡窯跡群は、大崎平野の南に位置する大松沢丘陵西端の丘陵斜面や丘陵末端の台地に立地する。現在のところ、待井沢窯跡A・B地点、萱刈場窯跡A・B・C地点、彦右エ門橋窯跡、横前窯跡、吹付窯跡、吹付B窯跡、吹付C窯跡の10地点で窯跡が確認されている（第1図、註1）。年代は8世紀中葉～10世紀初頭で、主に須恵器と土師器を生産したが、8世紀後半～9世紀初頭の彦右エ門橋・吹付B・吹付の3窯では瓦も併焼しており、これらに近い横前窯でも瓦を生産した可能性がある。その場合、大衡窯跡群の8世紀後半～9世紀初頭は、北部に瓦陶兼業窯が集中し、北から入る沢に対して三方からU字状に囲むように窯場が形成された。本期に須恵器・瓦生産はピークを迎えたと考えられる。また、8世紀中葉～9世紀前葉の窯は丘陵末端付近にあるが（萱刈場A・待井沢A・彦右エ門橋・横前・吹付・吹付B・吹付C）、9世紀後半の窯は彦右衛門橋を除いて丘陵奥につくられており（萱刈場B・同C・待井沢B）、窯場がそれまでより高い場所に移動する傾向が認められる（須恵器変遷は第4図）。こうした8世紀中葉以降の須恵器・土師器が一体となった継続的な土器生産は、大崎地方西部で他に認められず、大衡窯跡群は黒川以北十郡西側（山道）において中核的な役割を果たした拠点窯であったと考えられる。発掘調査は、萱刈場窯跡A地点と彦右衛門橋窯跡、吹付C窯跡で行われている。以下、萱刈場窯跡A地点と彦右衛門橋窯跡の概要を述べる。

1. 萱刈場窯跡A地点

遺跡中央の南斜面で8世紀中葉の須恵器を焼成した地下式窯窓が3基確認され、うち2基が調査された（SR2・3。後者は一部を調査）。もう1基（SR1）は製品の窯詰め前に天井が崩落している（宮城県 1995）。SR2は全長が4.5 m以上で、幅は5次床面段階で1.5 m、焼成部は床面が5枚あり、傾斜角は26°である。煙道は焼成部の奥壁中央から直立する。また、燃焼部の両側壁には小穴が1個ずつ認められ、焼成時の燃焼部閉塞に関わる施設とみられる。4次と5次の床面には、焼台に転用された須恵器が残されていた。焼台の多くは壊れ、半分に割り、伏せた状態で口縁部を斜面下位に向けて置かれており、5次床面では焼成部中央から奥壁にかけて横に10列以上並べていた。同様の例は、SR3のほか吹付C窯跡、日の出山



1 吹付C窯跡 2 吹付窯跡 3 彦右エ門橋窯跡
4 吹付B窯跡 5 横前窯跡 6 萩刈場A窯跡
7 萩刈場B窯跡 8 萩刈場C窯跡 9 待井沢A窯跡
10 待井沢B窯跡 11 河原遺跡 12 針遺跡
13 日の出山窯跡群

第1図 大衡窯跡群の位置

9世紀後半の窯は彦右衛門橋を除いて丘陵

奥につくられており（萱刈場B・同C・待井沢B）、窯場がそれまでより高い場所に移動する傾向が

認められる（須恵器変遷は第4図）。こうした8世紀中葉以降の須恵器・土師器が一体となった継続

的な土器生産は、大崎地方西部で他に認められず、大衡窯跡群は黒川以北十郡西側（山道）において

中核的な役割を果たした拠点窯であったと考えられる。発掘調査は、萱刈場窯跡A地点と彦右衛門橋

窯跡、吹付C窯跡で行われている。以下、萱刈場窯跡A地点と彦右衛門橋窯跡の概要を述べる。

窯跡群C地点2号窯（色麻町1993）、次橋窯跡1・2号窯（東北学院大学考古研1983）や山形県壇山古窯跡群第1地点1号窯（寒河江市1970）でも認められるが、SR2ほどの高い規則性はない。年代は日の出山C2窯や次橋窯が8世紀中葉、吹付Cが9世紀前葉、壇山窯が8世紀第4四半期である。

SR2からは、須恵器坏・高台坏・塊・盤・坏蓋・壺蓋・短頸壺・長頸壺・甕などが出土した（第2図）。坏はハ字状に開く皿形で、切り離しが分かるものは静止糸切りである。再調整は手持ちヘラケズリを主体とし、内面の立ち上り部に沈線が巡るものが多い。坏蓋は天井部が扁平で端部が短く折れるものと、低い天井で端部が折れないものがある。つまみはリングもしくは宝珠である。SR3からは須恵器坏・高台坏・坏蓋・甕などが出土した（第2図）。坏や坏蓋は、器形や技法からSR2に共通するものと異なるものに大別できる。後者は坏が箱形でヘラ切り後ナデ、坏蓋は低い天井で端部が直角に折れ、つまみは低い宝珠である。また、坏蓋の天井部内面に同心円アテ具痕が認められるものがあり、消費地での出土例が待たれる（49）。

2基の年代は、食膳具を較べるとSR2は日の出山窯跡群C地点と共に通性が高く、SR3製品はSR2と共に通する要素と後続する吹付窯や彦右エ門橋・横前窯につながる要素が認められることから、前者が8世紀中葉古段階、後者は8世紀中葉新段階に位置付けられる。したがって、萱刈場窯A地点は日の出山窯の最終段階に須恵器工人集団の一部が移って生産を開始し、8世紀中頃に新たな技術を導入したと考えられる。

2. 彦右エ門橋窯跡

遺跡西側を国道4号線が南北に縦断する。4号線の東では、遺跡北東部の北斜面や尾根付近で8世紀後半の地下式とみられる須恵器窯（宮城県1997）や8世紀後葉～9世紀初頭の須恵器廃棄土坑2基など（宮城県1996）が確認された。4号線拡幅工事に伴う発掘調査は2019～2022年に行われ、現在整理中である。灰原や土師器焼成坑22、木炭焼成坑3、鉄滓廃棄土坑2、堅穴建物15、掘立柱建物2、整地層、河川などから多数の遺物が出土した（宮城県2020・2021）。また、調査区外の南西斜面で窯が確認された。

堅穴建物は3時期以上の変遷が認められる。古いものは8世紀後葉～9世紀前葉、新しいのが9世紀後葉～10世紀初頭で、他はその間におさまると考えられる。カマドは前者が北カマド、後者は東カマドで、新しくなるにつれて東への傾向が強まる。堅穴建物は、ロクロピットを有するものがあること、床面に製品の素材となった粘土塊が認められるものがあること、外延溝が伴うものがあること、カマドの側壁や煙道の補強材として土師器甕や瓦が多く使われたことなどから、土器・瓦生産にかかる工房と考えられる。

土師器焼成坑は尾根の平坦面から南緩斜面に分布する。平面形は斜面上方を奥壁とする逆台形で、奥壁が直線的であるのに対し、前壁は手前側に膨らむ。また、壁の立ち上がりは奥壁や側壁が直立気味で、前壁は緩やかである。被熱痕跡は中央より奥の床面が最も強く、これに接する壁も部分的に認められるが、前壁側の床・壁はほとんど焼けておらず、奥壁側に偏るという特徴がある。土師器焼成坑は4基重複するものがあること、堅穴建物より新しいものがあること、緩斜面では9世紀後半の整地層より新しいことから、8世紀後葉～10世紀初頭の間継続的に生産を続けたとみられる。また、河川の堆積層は上層と下層に大別でき、前者はTo-a火山灰に覆われる。両層からは須恵器が多量に出土した。さらに、調査区外の窯は、隣接する土坑2基から瓦や窯壁、融着した須恵器・瓦が出土しており、8世紀後葉～9世紀初頭の瓦陶兼業窯とみられる。こうしたことから、彦右エ門橋窯は8世紀後葉～10世紀初頭まで継続して須恵器や土師器を生産し、8世紀後葉～9世紀初頭には瓦生産も行ったと考えられる。

これらの遺構からは、土師器・須恵器・瓦などが多量に出土した。土師器にはロクロ調整の坏・高台

壺・蓋・小形甕・長胴甕・甌などがあり、これらは色調が全体的に明るく、外面の黒班が目立たないという特徴を持つことから、土師器焼成坑で生産されたとみられる。須恵器は、河川上層と整地層が主として壺・壺・中甕・大甕であるのに対し、河川下層は壺・高台壺・双耳壺・塊・高壺・盤・蓋・壺・水瓶・中甕・大甕・甌などと器種構成が豊富である。このうち、双耳壺・塊・高壺・盤は官衙、水瓶は寺院およびそれらの関連遺跡で特徴的に出土する器種（官衙的器種）である。ほかに円面鏡や陶錘が認められる。

瓦は丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・熨斗瓦がある。軒瓦は遺構での共伴関係が不明であるものの、珠文縁素弁蓮華文軒丸瓦と顎面に鋸歯文が施された無文軒平瓦のみであることから、両者はセットであり（第3図）、この組合せを明らかにできた点は本窯の大きな成果となった。また、鬼瓦は2種類認められた。横前窯からは別のものが出土していることから、大衡窯跡群では3種類以上の鬼瓦が生産されたと考えられる。珠文縁素弁蓮華文軒丸瓦は一の関遺跡（寺院）・城生柵跡・菜切谷廃寺跡・名生館官衙遺跡・伏見廃寺跡・宮沢遺跡から、顎面に鋸歯文が施される無文軒平瓦は名生館官衙遺跡・伏見廃寺跡から出土している。一の関・菜切谷・伏見は県北3寺院と呼ばれており（進藤1990）、瓦は黒川以北十郡の西側、主として山道地方の城柵・官衙・寺院に供給されたと考えられる（第3図）。

8世紀前半の陸奥国北部における瓦生産は、多賀城・多賀城廃寺と黒川以北十郡の城柵・官衙・寺院に対し、後者の諸窯から多賀城系の瓦が一元的に供給されたが、8世紀後半以降は各地で独自の文様や製作技法が採用されるようになった。その結果、同じ瓦を共有する範囲は多賀城・陸奥国分寺・国分尼寺周辺、黒川以北十郡西側、同中央、桃生城、伊治城にまとめられ、瓦生産体制は前代の一元的・広域的なものから、個別的・狭域的な供給に変化したと考えられる（第3図、註2）。

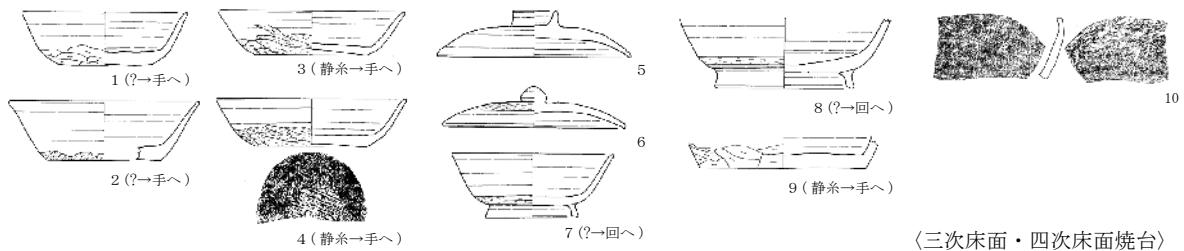
8世紀後葉～9世紀初頭の彦右衛門橋窯跡は、須恵器に官衙や寺院特有の製品が認められること、軒瓦のセットや鬼瓦が認められること、瓦の主たる供給先が県北3寺院や大崎市西側から色麻町にかけての城柵・官衙であることから、黒川以北十郡の山道を中心とする城柵・官衙・寺院に向けて製品を供給した官窯で、同時期の大衡窯跡群では中核的役割を果たした。また、本窯は8世紀後葉～10世紀初頭に土師器も生産したことから、その生産形態は、須恵器窯に隣接して土師器焼成坑が設けられた須恵器生産付随型（菅原1997）と考えられる。さらに、その初期段階はロクロ土師器が急速に普及する時期であることを考慮すると、彦右衛門橋窯に在地の非ロクロ土師器工人が取り込まれ、須恵器工人とともに製作することで新技術伝習の場となった可能性を指摘しておきたい。

註1 村田1988では河原窯跡と長嶋遺跡を窯跡に加えていたが、両遺跡とも他より低い場所に立地し、傾斜が緩やかであること、窯本体や灰原が確認されていないことなどから、窯跡ではないと判断した。工人集落（河原）や製品集荷場+有力者居宅（長嶋）といった窯跡群と密接な関わりを持った施設と考えておきたい。

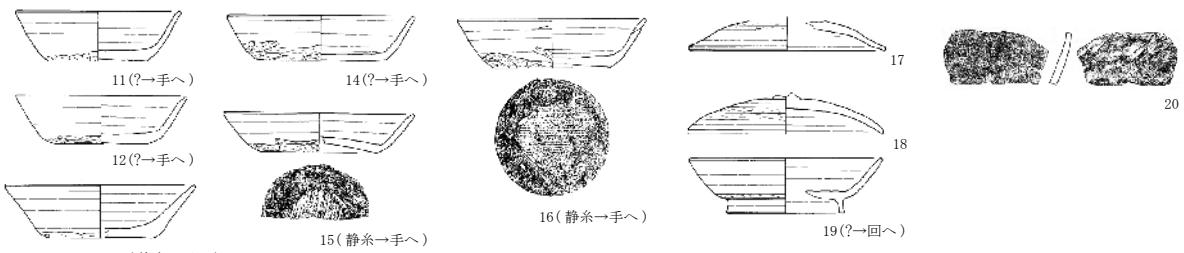
註2 この点をより古い時期に遡って見ると、8世紀初頭以前の瓦生産は個別的・狭域的であるため、むしろ8世紀前半の一元的・広域的供給が特異であったと考えられる。

関連文献

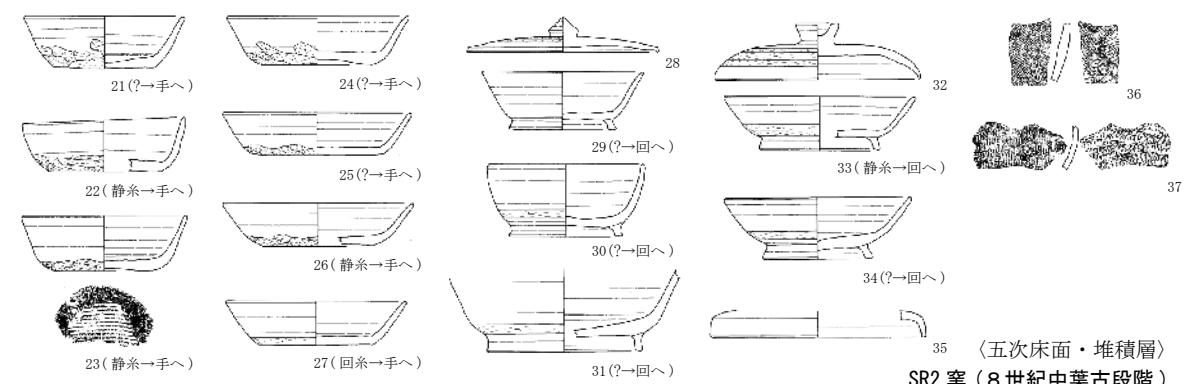
- 大衡村教育委員会 2019 「萱刈場窯跡」『亀岡遺跡・萱刈場窯跡ほか』大衡村文化財調査報告書第5集
寒河江市教育委員会 1970 「窯道具について」『平野山古窯跡群』
進藤秋輝 1990 「多賀城創建以前の律令支配の様相」『考古学古代史論攷』
菅原祥夫 1997 「東北南部—古代陸奥国の土師器生産体制と土師器焼成坑」『古代の土師器生産と焼成遺構』真陽社
東北古代土器研究会 2008 『東北古代土器集成—須恵器窯跡編—〈陸奥〉』
宮城県教育委員会 1995 「萱刈場窯跡」『下草古城跡ほか』宮城県文化財調査報告書第166集
宮城県教育委員会 1996 「彦右衛門橋窯跡」『下草古城跡ほか』宮城県文化財調査報告書第169集
宮城県教育委員会 1997 「彦右衛門橋窯跡」『舟場遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第173集
宮城県教育委員会 2020・2021 「彦右衛門橋窯跡」『第46回・第47回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
宮城県教育委員会 2021 「彦右衛門橋窯跡」『令和3年度宮城県遺跡調査成果発表会 発表要旨』宮城県考古学会
村田晃一 1988 「大衡窯跡群」『研究紀要』第14巻 東北歴史資料館



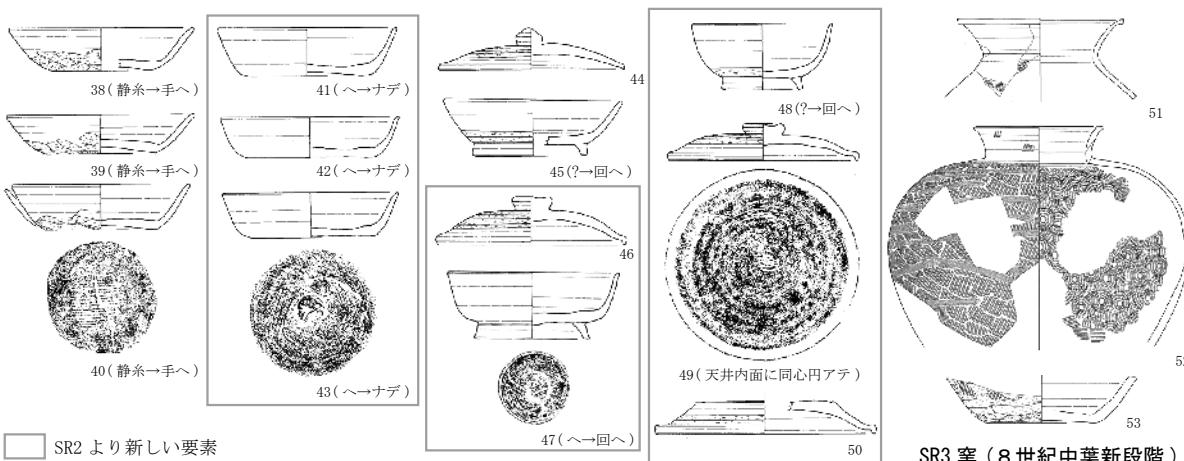
第三次床面・四次床面焼台



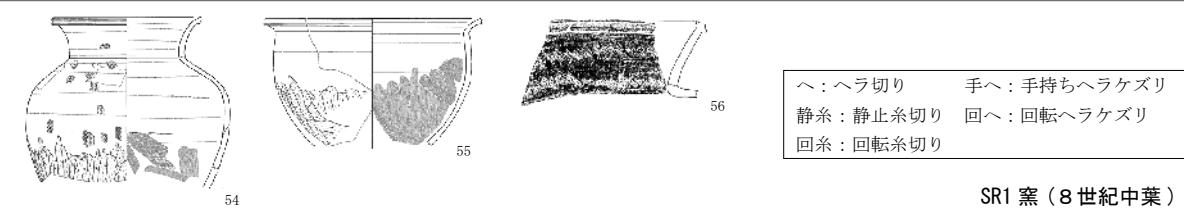
四次床面焼台・五次床面焼台



五次床面・堆積層
SR2窯 (8世紀中葉古段階)



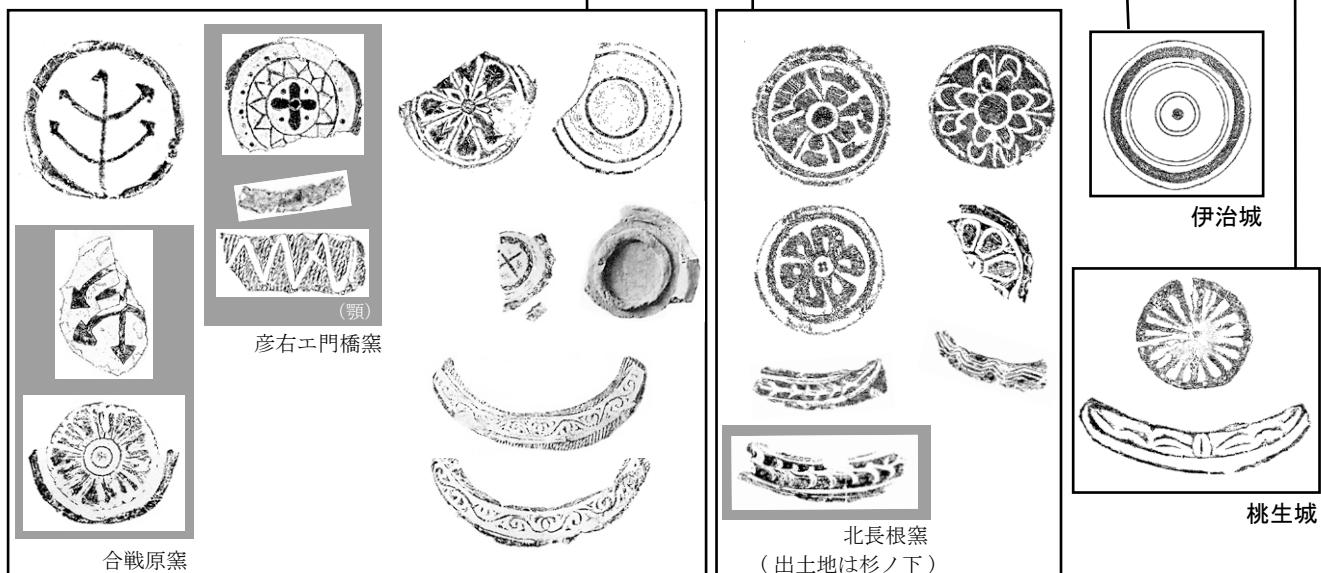
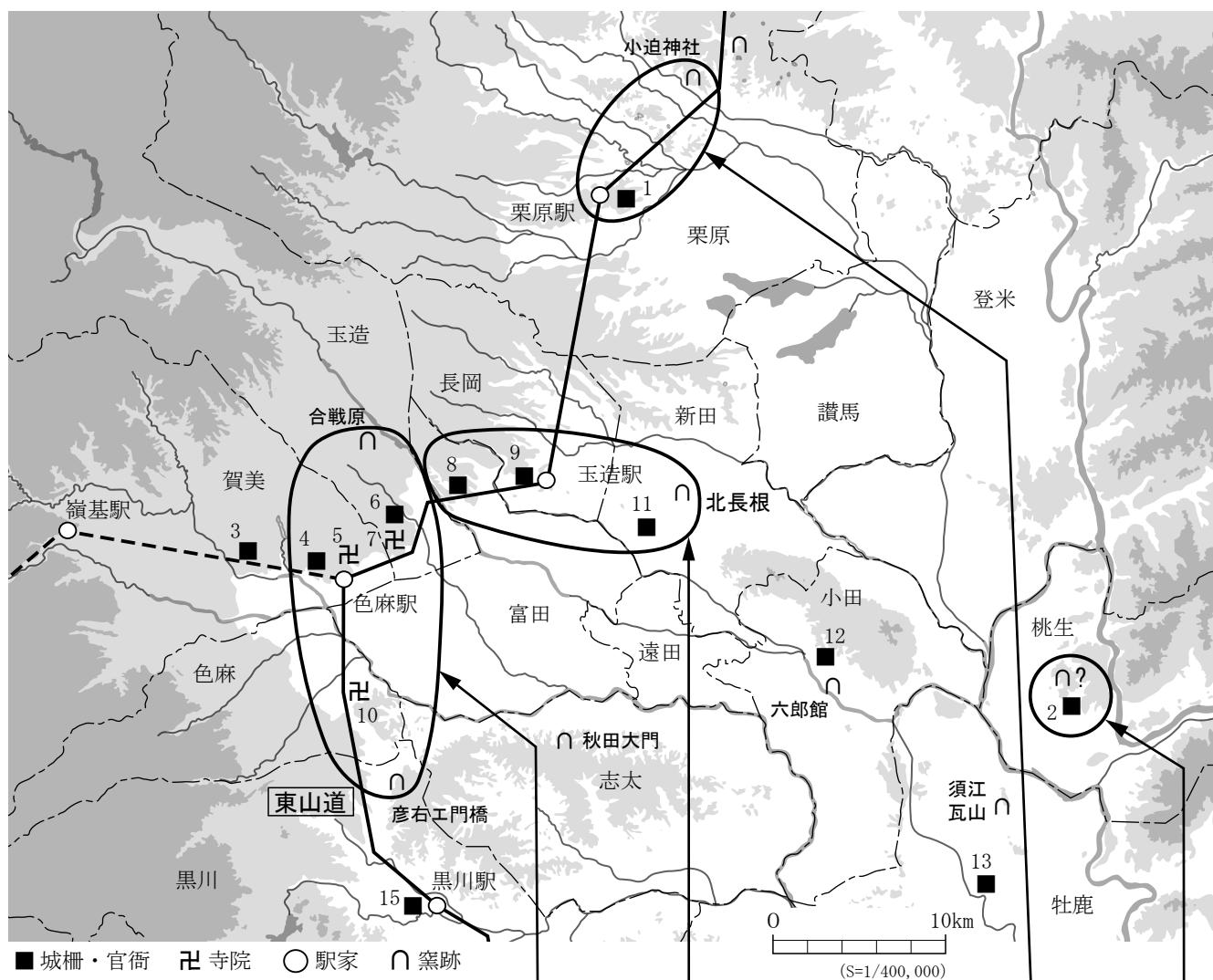
SR3窯 (8世紀中葉新段階)



SR1窯 (8世紀中葉)

0 20cm 0 40cm
(S=1/6) (壺のみ S=1/12)

第2図 萱刈場窯跡A地点 SR1～3窯出土遺物 (宮城県 1995に加筆・作成)



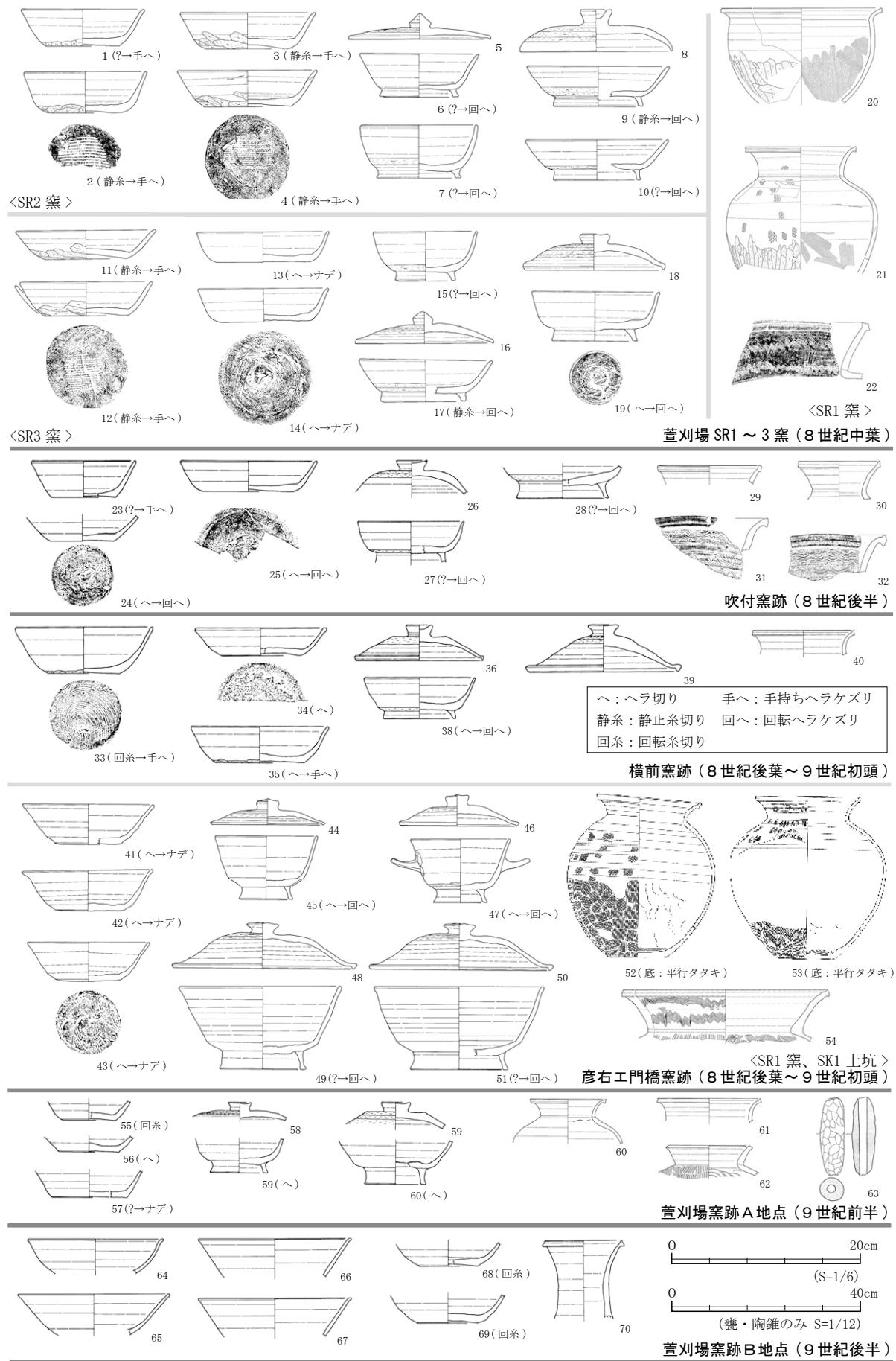
珠文縁素弁蓮華文・樹枝文・交叉唐草文を中心とする分布

変形重弁蓮花文・植物文を中心とする分布

1 : 伊治城跡、2 : 桃生城跡、3 : 東山遺跡群（賀美郡家）、4 : 城生柵跡、5 : 菜切谷廃寺跡（4の付属寺院）、6 : 名生館遺跡（玉造郡家）、7 : 伏見廃寺跡（6の付属寺院）、8 : 小寺・杉ノ下遺跡（富田郡家）、9 : 権現山・三輪田・宮沢遺跡（長岡郡家）、10 : 一の関遺跡（寺院）、8 : 新田柵跡（新田郡家）、12 : 日向館跡など（小田郡家）、13 : 赤井遺跡（牡鹿郡家）、14 : 一里塚遺跡（黒川郡家）
※富田郡と讚馬郡は、のちに色麻郡と新田郡に併合される。

※黒川以北十郡とは、黒川・色麻・富田・賀美・玉造・長岡・志太・新田・小田・牡鹿郡である（蝦夷郡の遠田郡を除く）。

第3図 陸奥国北部における8世紀後半以降の主要軒瓦の供給関係（新規作成）



第4図 大衡窯跡群の変遷 (宮城県 1995~1997、村田 1988 から作成)